

〈論 文〉

アイヌ語千歳方言における kane の用法

アイヌ語千歳方言における kane の用法

佐 藤 知 己

目次	1. はじめに
	2. 先行研究
	2. 1. 金田一京助
	2. 2. 知里真志保
	2. 3. 田村すず子
	2. 4. 村崎恭子
	2. 5. Refsing
	2. 6. 中川裕
	2. 7. 萱野茂
	2. 8. 先行研究のまとめ
	3. 千歳方言における kane の用法と問題点
	3. 1. 助動詞的用法
	3. 2. 接続助詞的用法
	3. 3. 副助詞的用法
	3. 4. まとめと問題点
	4. kane の機能再考
	5. おわりに
	謝辞
	参考文献

キーワード：アイヌ語千歳方言、助詞 kane、アスペクト、モダリティー、語用論的含意

1. はじめに

kane、あるいはこれに相当すると思われる形式は、アイヌ語の多くの方言に共通してみられ、主要な先行研究においても既に種々の記述がなされている（金田一 1931、知里 1936、知里 1942、

田村 1960、1988、1996、村崎 1979、Refsing 1986、中川 1995、萱野 1996など⁽¹⁾。これらのすぐれた記述によって、kane の機能は既に十分明らかにされて来ており、現時点で改めて付け加えるべきものはほとんどないと言っても過言ではない。とはいえ、以下に述べるように、これまで明らかにされている kane の用法は比較的多岐に亘るため複雑であり、統一的な把握が難しいという印象があることもまた否めない⁽²⁾。以下では、千歳方言の kane の用例を検討することによって、諸説に幾分かの整理を加え、この形式の理解をさらに進める上での一助としたい。

2. 先行研究

千歳方言の kane について考察する前に、kane に関する主な先行研究をみておくことにしたい。

2. 1. 金田一京助

金田一の kane に関する記述は以下のようなものである。

金田一 (1931 : 189) :

§ 282. kane 「然」。丁度 sekor が詞を受ける様に、情態を受けるのがこの kane である。ka は「も」(ka)と同じ指示辞か⁽³⁾。-ne は、必ず「である、なる」の ne であらう。

kur-un kane, 暗みわたりてししてゐる (或は、...てゐる)。

mina kane, にここにこそしてゐる (或は、...てゐる)。

hotuipa kane, 叫びそしてゐる (或は、...てゐる)。

此は、蒼然・泰然・噪然などの然、鏗爾・莞爾などの爾のやうな意味の語である。「さうある」「さうあつて」と、やはり指す意があつて sekor に似た語氣をアイヌの人々が意識して使つてゐる。

句の終りにも立つが、副詞句にも立つ。句の終りに立つ時は、kane-iki (iki は「物する」意)、kane-an (an は「ある」) の意味であると。

sekor-kane、と續けていふこともある。

sekor kane itak ruwe-ne, 「...と、さう云つた」。

sekor で導かれる詞は、「云ふ」の目的語ではなしに補語らしい。他動の ye (を云ふ) では受けずに、必ず itak (物を云ふ) の方で受けるのである。ye で受ける時は：

(1) なお、浅井 (1969)、切替 (1989)、奥田 (1997) にも kane(kan)について触れるところがある。

(2) 従って、異なる方言間ではもちろん、同一方言内部であっても、これらの kane (あるいは類似の形式) が同一の形式であるのかどうか、必ずしも自明ではないと言えよう。このような問題の存在を認めつつも、本稿の議論はこのような一見非常に異なっているかに見える kane の用法にある種の共通性が存在する可能性をあらためて指摘しようとするものである。

(3) ka を「も」とだけ関係づけるのはやや即断的かもしれない。詳しくは田村すす子説の項を参照。

sekor-okai-pe ye ruwe-ne.

しか ある ことを云つたことである

sekor-an-pe ye ruwe-ne.

しか ある ことを云つたことである

このやうに必ず、「然る事」をと、名詞にしまふ。こゝが又同じく「云ふ」であつても、第Ⅰ類動詞の ye と、第Ⅱ類動詞の itak との分れである。

金田一の記述の要点は、kane は動詞または副詞句に後置され、動詞に後続した場合は「ている」と訳せるような継続的な意味を表すこと、また、副詞句に後続した場合は、「そうある、そうあって」のような指示詞的な意味を表す、とまとめることができる。なお、動詞に後続する場合に、「ししてゐる、そしてゐる」のように「し」、「そ」のような助詞を加えた訳も同時に示している点が注意される。

2. 2. 知里真志保

知里の kane に関する記述は以下のようなものである。

知里 (1936 [1974] : 101 - 2) :

(c) 持続態(durative)

166 kane, kane-an, kane-okai

a kane(-an)、座つてゐる。a kane okuima-p 座つてゐて小便する者(女)

ash kane(-an)、立つてゐる。ash kane okuima-p 立つてゐて小便する者(男)

mina kane(-an)。笑つてゐる。mina kane iki. 笑つてする。

(d) 進行態(progressive)

167 kor, kor-an, kor-okai

rayayaise kor-an. 泣叫びつゝある。

ukoiki kor-okai. (彼等) 喧嘩しつゝある。

rayaise kor ukoiki kor-okai. (彼等) 泣き叫び乍ら喧嘩してゐる。

知里 (1942 [1973] : 571) :

第二種の助詞(終助詞)

(28) kane 樺太方言。北海道の hani, ani と同じく、命令文に附く助詞である。uto tompa kane!

〈戸を 閉めろ ヨ〉。

(29) kanne 樺太方言。kane を強く云った形。命令文に附く助詞である。monrajke hene ki kanne. (「物語」p.36) 〈しごと でも しな よ〉。

第三種の助詞 (接続助詞)

(54) kane (イ)「……して」「したまま」「……しながら」「……の状態で」。a kane okujma. 座つて (座つたまま、座りながら) 小便した⁽⁴⁾。(ロ)…… kane an. 状態の継続、動作の結果を示す。「……てゐる」「……である」。(ハ)…… kane iki[ci]. さういふ挙動をする。(ニ)副詞又は副詞句に附く。訳すに及ばず。teeta[kane] 昔。a-ramrami unno e-horka-roski apkor [kane] jajnu-an. 私の鱗までも逆立つかのやうに思つた (身の毛のよだつ思ひをした)。

(55) kanne=kane

kane に関する知里の記述は次のようにまとめられる。すなわち、知里 (1936) では kane が「持続態」を表すことを述べているに過ぎないが、知里 (1942) では樺太方言の相当する形式 kanne の用法にも触れて、状態の持続、動作の結果を表す用法に加え、命令の用法があること、また、副詞句に後続する用法があることにも触れている。ただし、副詞 (句) に後続する場合は、「訳すに及ばず」として、積極的な機能を認めていないようである。

2. 3. 田村すず子

田村の沙流方言の kane に関する記述は以下のようなものである。

福田 (田村) (1960: 75—76) :

18. kane

いわば助動詞と接続助詞と副助詞の特徴を少しずつ合わせ持っているような助動詞である。即ち、動詞的形式と kane との結合形は動詞的形式であることもあり (助動詞の性質、はじめの 5 例)、副詞的形式である (連用修飾語という成分としてあらわれる) こともある (接続助詞の性質、次の 5 例)。副詞的形式と結合することもあり、その結合形はそのまゝ副詞的形式である (副助詞の性質、最後の 4 例)。名詞的形式とは結合しない。

「予期されない意外なことだという気持を表わす」《こともあろうに)……なんか(している)》。予期されない意外なことを表わすという点で、副助詞の ka 《も、なんか》と似通っている。語源的には kane の前半はこの ka と同じもので、後半は動詞や格助詞の ne と関係があろう⁽⁵⁾。

(4) 以下の議論を先取りすれば、この形式の意味は、厳密には「(実際に) 座って小便をする」ではなくて、「(実際に座るまではいかないにしろ) 座っているといてよいほどの状態で小便をする」という一種の誇張を含んだ意味である可能性がある。

(5) 注 1 でも述べたが、ka には他に不定の ka があり、また、否定的動詞の前に現れる ka もある。従って、「も」の ka とだけ関係付けるのは独断的ではないだろうか。Sato (forthcoming) による様似方言の資料では、「も」は

'ápto rúy wa kutéyne 'orá kúynaye
 雨が ひどくて わたしはぬれて わたしの尻の溝
 'opes náy sán kane.
 にそって沢が流れ てるんだ
 kasúsne kane yakún pírka wa.
 あまり大したことが なかった のならよかったわ
 nén ka né wa 'iyúnunep 'ék kane kor mák
 どうか し て 母親熊が 来 でもしたらどう
 kúyki kusú.
 しよう
 'ónnayke 'amé 'o kane tópenpe.
 中に あめが はいっ ている おかし
 'íne 'urepet kór kanep ne nóyne 'árpa
 四本 指を 持っ たもの である らしく行った
 ruwe 'án.
 跡が ある
 téknum takúp 'etúk kane kúysitoma.
 拳 だけ ででき て こわかった
 'a'ehénipopo kane níwrotke.
 みぶるいする ほど すっぱい
 'emús kór kane nísapno 'awósma.
 刀を 持っ て 急に はいってきた
 sapárusihi méske kane 'án.
 頭の皮が むけ て いる
 suwóp or kómare kikír mák 'iki 'áyne
 箱 に入れておいた 虫がどうやってだか
 'etúk kane 'ikí kor án.
 出 て来 て いるよ
 kúttokono kane hótke.
 あおむけ に ねる
 'upákno kane 'oká kánpisos.
 ちょうど同じくらいの大きさ の ノート

kay であるのに対し、沙流方言などの kane は様似方言においても kane であり、*kayne ではない。この問題はそう単純ではない可能性があり、いずれにせよ、一つの方言内部だけでなく、他方言の形式も考慮に入れて語源を考える必要があると思われる。

po'o kane 'án pirákka 'ús.
 よりによって へん な げたを はいている
 táp néno kane te'éta 'akór itak
 こんな よう に 昔の われわれの ことばは
 samo 'ayé.
 云はれ ない

田村(1972:160) :

6. kané

S₁ kané S₂は、E₁が意外あるいは異常だという場合の言い方で《こともあろうにE₁して》《E₁なんか...して》《E₁しちゃって》という感じである。kané は§ § 1—5にあげたものと構文法上の機能が異なり、助動詞と副助詞と接続助詞の職能を合わせ持っている。すでに福田すゞ子「アイヌ語沙流方言の助動詞」の§ 18で扱ったので、ここでは省略する。

田村(1988:44) :

ス) kané…いわば、助動詞と接続助詞と副助詞の特徴を少しずつ合わせもっているような助詞である。すなわち、動詞句と kané との結合形は動詞句であることもあり(助動詞の特徴。下のはじめの2例)。副詞句である(連用語としてはたらく)こともある(接続助詞の特徴。下の次の2例)。副詞句と結合することもあり、その結合形はそのまま副詞句である(副助詞の特徴、下の最後の2例)。名詞句とは結合しない。

予期されない意外なことだという気持ちを表わす{(こともあろうに)～なんか(している)}。予期されない意外なことを表わすという点で、副助詞の ka 「も、なんか」と似通っている。語源的には、kane の前半はこの ka と同じものであろう。

nen ka ne wa iyununep ek kane
 どう か し て 母親(熊)が 来 でもし
 kor mak kú-iki kusu.
 たら どう (私は)し よう
 onnayke ame o kane tópenpe
 中に 飴が 入っ ている お菓子
 emus kor kane nisapno awosma.
 刀を 持っ て 急に 入っ てきた
 aparusihi meske kane an.
 頭の皮が むけ て いる

kuttokono kane hotke.

あおむけ に ねる

upakno kane oka kanpisos

ちょうど同じくらいの大きさ の ノート

東部方言で、kane は「～しながら」、カラフト・アイヌ語で、kane も同様である。

田村 (1996 : 273 - 74) :

kane カネ 2 【助動／接助／副助】(意外、予想以上、誇張の表現に多く使われる)。① [助動] (なんと)...している。ponpon kane ayne tane us wa isam ポンポン カネ アイネ タネ ウシ ワ イサム だんだん小さくなってとうとう消えてしまった。《S》 ine urepet kor kane p ne noyne イネ ウレペツ コロ カネ プ ネ ノイネ 四本指を持っているもの(ばけもの熊)であるらしく。② [接助] (なんと)...して、...したままで、...するほど。sinu kane reye kane ahup シヌ カネ レイエ カネ アフナ 彼らはひざをついて身をずらしはって家の中へ入った(遠慮して身を低くして入る様子)。mérayke wa hecururu kane an メライケ ワ ヘチュルル カネ アン 寒いので首をちぢめている。《S》 suwop or k=ómare kikir mak iki ayne etuk kane iki kor an スウオプ オロ コマレ キキリ マク イキ アイネ エトゥク カネ イキ コラン 箱に入れておいた虫どうやって出てきたのだろう。ku=sanpe ka wen kane a=útarihi k=ésikarun クサンペ カ ウェン カネ アウタリ ケシカルン 気持ちも暗くなるほどに身内の者に会いたい。《S》 ③ [副助] (慣用表現の中で、副詞句の後に置かれて) néno kane an ネノ カネ アン...とそっくりだ。sísam nisu a=kutkore ruwe néno kane an シサム ニス アクツコレ ルウェ ネノ カネ アン 日本の白に帯をしめさせたのみたいだ。(néno an ネノ アン は《...に似ている》。) sekor kane セコロ カネ...というふうに(言った)(sekor セコロ 《と(言った)》だけよりもちょっとした強めのニュアンスが加わる)。

以上の記述から、沙流方言の kane に関する田村の記述の要点は、主として kane が助動詞、接続助詞、副助詞の三つの機能を合わせ持つ語であること、「意外」、「強め」のようなニュアンスを表すこと、の二点にまとめることができる。

2. 4. 村崎恭子

村崎はカラフトライチシカ方言の kane という形式について以下のように記述している。

村崎(1979:65) :

§ いろいろな終助詞の意味と用法

1) kanne.

丁寧な依頼を表す。非常によく使われる。〈～してください〉

例文

nee carehaw kiiwa 'inuure kanne. 〈何かお話を私たちに聞かせて下さい〉

hanka yaykatanu kanne 'otoopempe 'ee kanne. 〈ご遠慮なくお菓子をあがして下さい〉

村崎(1979:113-14) :

4. 4. 2 APⅡ: a + 副詞強調語

これは副詞連語とでも言うべき結合である。本来の副詞に後置詞あるいはそれ以外の形式が結びついて副詞のもつ何らかの意味を強めたり変化させたりする。

tani 「今」

tani 'isanka 「今にも」

副詞と結びつく形式に従って以下に述べる。

1) a+ kanne

nah kanne 「こんなに」

nah kanne ka 'itah kuwantehe nee ruuhe 'an. 「こんなにもことばを私は覚えたんなあだ
[ママ]」

hempara kanne 「いつになったら」

hempara kanne niskuru pirika kusu. 「いつになったらお天気がよくなるのだろう」

'ekas kanne 「あまりにも～すぎる」

'ehawehe 'ekas kanne yuhke. 「お前の声はあまりにも大きすぎる」

yeeruye kanne 「最も、一番」

yeeruye kanne poroope 「最も大きいもの」

村崎(op. cit. :116) :

3) v + kanne

副詞強調語のところで挙げた kanne と同じものだが [ママ]、これはそんなに productive ではない。

tuunah kanne 「早く」

'ohoro kanne 「遅く」

村崎(op. cit. : 129 - 30) :

6) kanne

「～ながら、～して」。継続的な動作と平行して他の動作が行われる。

1. 'ahci cis kanne yuukara 'ike 'ennuure. 「おばあさんは泣きながら歌ってきかせてくれた」
2. 'ocinakarine yaykara kanne 'ahkas wa. 「気をっ [ママ] けて身仕度して行きなさい」
3. 'unci yaakeketa 'an seeseh wahka 'ampa kanne 'eh. 「火の上にあるお湯を持って来なさい」
4. 'ahci kuwa koro kanne 'ahkas kusu 'an. 「おばあさんは杖をつきながら歩いている」
5. hanka yaykatanu kanne 'ee wa. 「遠慮せずに食べなさい」
6. 'ekema 'etokoho 'onne 'inkara kanne 'ahkas. 「足元を見ながら歩きなさい」
7. tani 'ohta 'ahapan [ママ] kun cise reekoh kitayehe ka 'iporo pirika 'ike nikipihi ka ran kanne 'an kusu 'an. 「これから入ろうとしている家はとても屋根も色がきれいで光もさしている」
8. pirikano henke tura 'uraanupan 'okayanuwa. 「元気でおじいさんと仲良くして暮らしなさい」
9. casan kanne paye'an. 「走りながら行きましょう」
10. 'ikuu kanne 'itah kusu 'an. 「たばこをすいながら話している」
11. kuhosipi kanne kunukara. 「帰りながら見た」
12. kuhosipi kanne taa 'aynu ku'ekaari. 「帰る途中であの人に出会った」
- 10、11、12の kanne は13) raapokeketa と置き換えられる。

村崎のカラフトライチシカ方言の kanne に関する記述は、知里と同様、kane が命令、継続的な動作を表すほか、副詞に後続する用法を持つことを述べている⁽⁶⁾。ただし、副詞に後続する場合の機能を、「意味を強めたり変化させたりする」としているが、どのように「意味を強めたり、変化させたりする」のかは述べていない。

2. 5. Refsing

Kirsten Refsing は静内方言をもとにして、kane について以下のように記述している。

(6) ただし、同じく樺太方言であっても内路方言では kane と kanne は別形式と解釈され得る可能性があると言う（高橋靖以の示教による）。

Refsing (1986 : 250 - 51) :

14.12.3 Contemporal Conjunctionalizers

Kane

Kane indicates that two acts or events occur simultaneously.

Ex. 437. “*Sinenne paye an na*”, *ari hawki an kane soyenpa an*

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

(1: alone, 2: go, 3: I, 4: assertive sentence final, 5: quotationalizer, 6: say,
7: I, 8: while, 9: go out, 10: I)

“I’ll go alone”, I said while leaving the house.” [sic.]

After stative verbs *kane* indicates the circumstances or state, which form the background of the following sentence.

Ex. 438. *Toon korsi omap wa, ku sanpe wen kane ku omap.*

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

(1: that, 2: child, 3: love, 4: and, 5: I, 6: heart, 7: be bad, 8: -ing, 9: I,
10: love)

“Loving that child, I love her painfully much.”

Two sentences connected by *kane* generally have the same subject, but there are exceptions to this.

Kane is also used in the analytically constructed auxiliary for the uncompleted aspect (see 14.9.2.4)

In the western Hokkaido dialects, *kor* is used to describe simultaneity between two predicates (Tamura: 1972b: 148ff), while *kane* is a verb auxiliary with a totally different meaning, namely that of providing a nuance of surprise to the meaning of the predicate which it follows (Tamura: 1960: 75), but this etymological explanation is hardly applicable to the conjunctionalizing *kane* of the Shizunai dialect. In the Sakhalin Raychishka dialect there is a conjunctional suffix, *kane*, which is similar to the Shizunai *kane* in meaning (Murasaki: 1979: 129ff).

Refsing の *kane* に関する記述は、静内方言に基づいており、同時性や事態の背景を表す接続助

詞としての用法があることを指摘しているが、田村(1960)の指摘する「意外性のニュアンス(a nuance of surprise)」は静内方言の接続助詞の kane にはあまり当てはまらない、としている点が注目される⁽⁷⁾。

2. 6. 中川裕

千歳方言についての中川の kane に関する記述は以下のようなものである。

中川(1995:144)：

カネ kane²【接助】 「～して」の意味で、ワ wa やヒネ hine と同じように使われる。とくに常套句では、よく用いられる。パシ カネ テレケ カネ pas kane terke kane 「走ったり跳んだりして」。

カネ kane³【副助】 ちょっとした驚き、意外な気持ちなどを加える。アネピッタ カキシマ ワ アン カネ コロ オカアン anepitta kisma wa an kane kor oka=an (子供をかわいがって)ひと晩中でも抱いていた[N8808312. UP]「エポホ イコホッパ」セコロ カネ ハウエアン マ クス “e=poho i=kohoppa” sekor kane hawean wa kusu 「子供を私に置いていってくれ」などということ言うので[N9306021. YR]

中川の千歳方言の kane に関する記述は、田村の沙流方言に関する記述と基本的には一致するとみてよいであろう(もっとも助動詞的用法の有無については言及していない)⁽⁸⁾。

2. 7. 萱野茂

萱野の kane に関する記述は以下のようなものである。

萱野(1996:196)：

カネ【kane】 ～して。ポン セタ ア・トラ カネ エキムネアナクス(エキムネ・アンアクス) ヒナク ワ シネ イセボ ピッコサヌ ア・エラムトイ=小さい犬を連れて、山へ行くと、どこからか一匹のウサギがさっと出て私はびっくりした。

(7) Refsing の強調する沙流方言との差異の指摘は貴重であるが、再検討を要する点もあるようである。例えば、Refsing のあげている例文438は、まさしく田村(1996:274)が挙げている ku=sanpe ka wen kane a=utárihi k=ésikarun「気持ちも暗くなるほどに身内の者に会いたい」という例文と同種のものである可能性がある。やはり「胸が苦しくなるほどにかわいく思う」という意味なのではないか。

(8) 例えば、中川は anepitta kisma wa an kane kor oka=an のような kane を副助詞とするが、このような kane の分布は他の副助詞とは異なる点に注意すべきであろう。すなわち、一般に動詞+副助詞に kor のような接続助詞が直続することはない。

カネ【kane】 ～(の) まま。

カネ【kane】 様子・エッ カネイキ＝来た様子だ。

萱野の記述は田村と同じく沙流方言に基づくものであり、簡潔ではあるが、kane が同時性を表す場合のあることを述べている。また、kane iki という形式が一種の比況の形式(「ようだ」のような意味を表す形式、益岡、田窪(1992:133—34) 参照)であると述べている点に注意される。

2. 8. 先行研究のまとめ

以上、これまでの kane (kane) に関する諸説をみてきたが、これらから明らかなように、その用法は多岐にわたり、加えて方言差が存在する可能性もあって、見解の差は小さいとは言えない。それらを承知の上で、あえて簡潔に諸説を要約すると以下ようになる。

1) これまでの記述は全て何らかの点で kane に継続あるいは同時性のような、いわばアスペクトに関わる意味、用法を認めている。

2) 金田一、田村、村崎、中川は、kane に強調の意味を認めている。特に田村、中川は「意外」、「驚き」、「誇張」などの表現を用いて kane の意味を説明している。

次節では、先行研究で指摘されて来たこのような kane の性質が千歳方言の kane にも当てはまるかどうかを検討し、問題の所在を明らかにしたい。

3. 千歳方言における kane の用法と問題点

ここで、千歳方言における kane の用法を、少し詳しくみてみることにしよう。田村(1996)の記述にならない、ここでは kane の用法を助動詞的用法、接続助詞的用法、副助詞的用法に分けてみていくことにする。

3. 1. 助動詞的用法

千歳方言における kane の助動詞的用法とみられる例には以下のようなものがある(ただし、kane には訳を付けないままにしておく)⁽⁹⁾。

- (1) seta poka ci us kane p e-ekaranke ka
犬 でも 陰茎 付く もの 2SG. OBJ. 一近づく たり

(9) 本稿では以下のような略号を用いる。1(1人称)、2(2人称)、3(3人称)、INDEF.(不定人称)、SG.(単数)、PL.(複数)、INCL.(包括的)、EXCL.(除外的)、TR.(他動詞)、INTR.(自動詞)、SUBJ.(主格)、OBJ.(目的格)、EPEN.(挿入子音)、POSS.(所属接尾辞)。

eaykap pe ne ruwe ne na hani.

できない もの だ の だ ぞ よ

「たとえ犬たりともおちんちんの付いたものはお前に近づいたりできないものなんだからね。」

- (2) a-poho utari, opitta tura wa

INDEF. TR. SUBJ. 一息子 た 皆 連れ て

arki kane p ne kusu...

来る もの だ から

「私の息子たちが彼らを皆を連れて来るものだから……」

- (3) i-y-ahunke kusu soyne hine, a-kor sontak

INDEF. OBJ. -EPEN, -入れる ために 出る て、 INDEF. TR. SUBJ. -持つ 幼児

pon tekehe ani kane hine, ahup pa apekur an...

小さい 手-POSS. 持つ て 入いる て 火にあたる なさい

「私たちを入れるために出て来て、私の幼児の小さな手を取って、「入って休みなさい……」

- (4) pirka usike a-i-konumke wa,

よい ところ INDEF. TR. SUBJ. -INDEF. OBJ. -選ぶ て

a-i-sere wa hosippa-an,

INDEF. TR. SUBJ. -INDEF. OBJ. -背負う て 戻る-INDEF. INTR. SUBJ.

kane kor oka-an

つつ いる-INDEF. INTR. SUBJ.

「よいところが私たちに選ばれて、私たちに背負わされて、私たちはもどっていた」

- (5) piskanike a-tekuyruke a-puni hine, oro wa

周り INDEF. TR. SUBJ. -つかむ INDEF. TR. SUBJ. -持ち上げる て それ から

as-an kane wa, itak-an hawe ene an i

立つ-INDEF. INTR. SUBJ. て 話す-INDEF. INTR. SUBJ. 話 こう ある こと

「(桶の) 周りを私はつかんで持ち上げて、そして立って、いわく」

- (6) a-yuputari a-unihi okari cisekar wa

INDEF. TR. SUBJ. -兄たち INDEF. TR. SUBJ. -家 まわりに 家を建てる て

pirka katkemat etun ma korkor kane wa a-unihi okari oka

良い 奥さん 取る て 持つ て INDEF. TR. SUBJ. -家 まわりに いる

「私の兄たちは私の家のまわりに家を建てて良い奥さんを貰って、それぞれ結婚して私の家のまわりに住んだ」

にアスペクトとは通常無関係と思われる副詞的形式と共起することも問題を含んでいる。なお、これまでのところ、適切な例はあまり見いだされていないが、たとえば次のような例も問題となろう。

(10) yaske usi, makiri ani a-yasa kor, yaske,

割れる ところ 小刀 で INDEF. TR. SUBJ. -割る と 割れる

nani yaske, yaske, yaske kane wa, oro wa,

すぐ 割れる 割れる 割れる て それ から

a-poypa wa ipehe a-kar

INDEF. TR. SUBJ. -はじくる て 実 INDEF. TR. SUBJ. -作る

「(クルミの) ひびが入ったところをナイフで割れば、割れる。すぐに割れる。割れてからはじって実を出す」

この(10)の例では、yaske「割れる」に kane が後続しているが、これを「割れている」と状態的に解釈しなければならない必然性は必ずしもないように思われる。無理に解釈すれば、「割れた状態で」という意味であるとすることもできるであろうが、そのような状態であることにわざわざ言及しなければならないような文脈的条件（すぐにまた殻がくっついてしまうなど）はここではないよう思われる⁽¹¹⁾。

次に、「意外」、「驚き」のようなニュアンスについてみることにする。例文の中には、「驚くべきことに」、「意外なことに」、「なんと...している」のような意味で理解できる例がいくつかみられる。たとえば、(1)は、「驚くべきことにおちんちんが付いているもの」、(3)は「意外なことに手まで取って」、(4)は「驚くべきことによいところを背負わされて戻って」、(5)は、「驚くべきことに立ったままで」、(6)は「驚くべきことによい嫁さんをとって」、(7)は「驚くべきことに風を切って」、(8)は「驚くべきことに子供をしまったままで」、(9)は「驚くべきことに尾根も越えて」のような意味を表しているものと解釈できる可能性がある。しかしながら、そのような解釈を積極的には考えにくいと思われる例もある。たとえば、(2)は、相手が自分たちを招待してくれるので、当然、自分の息子も相手たちみんなをいつも招待する、という文脈である。従って、「驚き」、「意外」の意味は、この例の kane には適用しにくいように思われる⁽¹²⁾。

以上の考察は、先行研究の結論を、主に広義の文脈を用いて検証しようとしたものであって、先行研究の結果が千歳方言の kane にもかなりの程度当てはまるという結論が得られたと言えそうであるが、反面、前後の文脈の意味に依存し過ぎていて、客観性に乏しいという面は否定できない。そこで、助動詞用法の kane の起こる環境をもう少し詳しく見てみると、kane の分布には興味深い制約があるようである。すなわち、kane の直後に立ち得る助詞の種類にはある種の制限のある可能性がある。

(11) 結論的に言えば、この場合の kane は、婉曲、または比況の意味で、yaske kane wa oro wa は「割れたようになってから」あるいは「割れなどしてから」のような意味である可能性がある（後述）。

(12) もっとも田村(1996)の「誇張」、「強め」のような解釈は可能かもしれない。

これまでのところ、助動詞の用法の *kane* の直後に立つ接続助詞の例としては、*kor*「つつ」(9例)、*wa*「て」(8例)、*hine*「て」(4例)、*ayne*「したあげく」(2例)、*akus*「したところ」(1例)の例があるだけで、例の数も非常に少ない点が注目される。以下に例を追加する(*kane* は特に訳さないで置く)。

- (11) *i-tukarike* *kosikeranaatte kane ranke kane ayne*
 INDEF. OBJ. -手前 顔を上げる 下げる あげく
 「私のほうに顔を上げたり下げたりしたあげく」

- (12) *rep ta paye-an* *kane akus*
 沖 に 行く-INDEF. INTR. SUBJ ところ
 「沖に私たちが行ったところ」

仮定条件を表す接続助詞 (*yak*, *yakka*, *yakne*, *yakun*, *ciki*)、逆接を表す接続助詞、または接続助詞的形式 (*a p*, *hike*, *korka*)、理由、目的を表す接続助詞 (*kusu*)、比況を表す接続助詞 (*koraci*, *kotom*, *noyne*) のいずれとも共起した例はない。また、副助詞、終助詞と結合した例もこれまでのところ見あたらない⁽¹³⁾。このような *kane* の分布上の制約に対する解釈はいくつかあり得るであろうが、少なくとも助動詞的な *kane* は、副詞節の中に収まりにくい傾向があることは確かであろう⁽¹⁴⁾。

3. 2. 接続助詞的用法

次に、*kane* の接続助詞的用法をみることにしよう。ここでは便宜的に、*kane* の用法を「程度(ほど、まで)」、「継続、同時性(て)」の二つに分けて考察する。両者の区別は厳密なものではなく、あくまでも仮定的なものである。

「程度」を表す *kane* の用例：

- (13) *ku-poppetaasin* *wa cik kane ku-poppetaasin*
 1SG. SUBJ. -あせをかく て 滴る ほど 1SG. SUBJ. -汗をかく
 「私は汗をかいて滴り落ちるほど汗をかいた」

- (14) *yayeaskay* *kur a-ne* *kane an-an* *wa*
 独り立ちできる 人 INDEF. TR. SUBJ. -なる ほど いる-INDEF. INTR. SUBJ. て

(13) 田村(1993:36)には *kane easir* という例が7例みられる。また、田村(1993:37)には *kane nankor yakun* という例が1例みられる。

(14) 名詞的形式の前や等位的な接続助詞の前に現れる *kane* と文末の *kane* との関係はなお考察が必要である。

「独り立ちできる男に私はなった位であって」

- (15) supuya rikinrikin kane uhuy noyne

煙 上がる ほど 燃える ようだ

「煙がどんどん上がるほど燃えているようだ」

- (16) tane nupuri kurka cup rari kane siran

今 山 上 太陽 押す ほど 様子である

「今や山の上を日が押す位の頃合いになった（太陽が今しも沈もうとしている）」

- (17) kotan kesehe homar kane kotan pakehe homar kane

村 端 霞む ほど 村 頭 霞む ほど

poronno cise an ruwe ku-nukar a wa

たくさん 家 ある の 1SG. SUBJ. -見る た よ

「（東京に行って）町の始まりや終わりが霞んで見えないほどたくさん家があるのを私は見たよ」

上の例から明らかなように kane は事態の形容に用いられ、ある事態の進行状況や状態の程度を表すことがある。これらの例は、「驚き」、「意外」、「誇張」のような解釈と多くの場合、極めて良く適合する。(13)を例にとれば、「驚いたことにポタポタ滴り落ちるくらいに汗をかいた」のような意味である可能性がある。もっとも、「驚き」、「意外」、「誇張」のニュアンスが考えにくい次のような例もある。

- (18) poro siri a-nukar kane poro, matkaci

大きい 有様 INDEF. TR. SUBJ. -見る ほど 大きい 娘

「成長して一人前になったことが誰にもわかるほど成長した娘」⁽¹⁵⁾

「継続、同時性」を表す kane の用例：

次に、程度の形容とは考えにくく、継続や同時性を示すと考えられるものの用例を挙げる。

- (19) a-kor mantari ranma ekutkor kane an hine ahun

INDEF. TR. SUBJ. -持つ 前掛け やはり 締める て いる て 入る

(15) この文の解釈には疑問がある。本当はどのような意味なのか、なお検討すべきであるが、一応、ここでは kane を程度を意味するものとみて、訳のように解釈した。

「私の前掛けをやはり締めて入って来た」

- (20) piskan apa un apa un kane oka wa poronno an na

両側 戸 付く 戸 付く て いる て たくさん ある よ

「(廊下の) 両側にずっと戸が付いていて (部屋が) たくさんあった」

- (21) pirka pon okaypo uruyruk kor an pekor

良い 若い 若者 震える つつ いる かのよう

inkar-an, wa a-kopetkasuy kane, wen inkar

見える-INDEF. INTR. SUBJ. て INDEF. -TR. SUBJ. -渡渉する て ひどい 見る

toy inkar a-ki wa asinuma ka petkasuy-'an ma

ひどい 見る INDEF. TR. SUBJ. -する て 私 も 渡渉する-INDEF. INTR. SUBJ. て

「良い若者が震えているかのよう私には見えて、私は若者の方へ川を渡って穴のあくほど見て、私も川を渡って」

- (22) a-mire wa arpa amip amip ne ya huku ne ya ka

INDEF. TR. SUBJ. -着せる て 行く 着物 着物 だ か 服 だ か も

sak kane ear amnep patek mi kane an

無い て ただ 下着 だけ 着る て いる

「着せられて行った着物、着物だか服だかも無くしてただ下着一枚だけ着ている」

- (23) tasiro ka anpa makir ka anpa kane oka wa ukohoyuppa

山刀 も 持つ 小刀 も 持つ て いる て みんなで走る

「山刀も持ち小刀も持っていて走り回った」

- (24) mina kane i-sikerayke wa oka wa kusu

笑う て 1SG. OBJ. -みつめる て いる て ので

「笑って私を見つめていたので」⁽¹⁶⁾

- (25) numan onuman hucimurasan ek kane iki.

昨日 夜 藤村さん 来る て する

「昨夜、藤村さんが来ていた」⁽¹⁷⁾

(16) minamina kor an「にこにこしている」のような例があるので、mina kane との違いが問題となる。ここでの kane は、「笑ったりなんかして」という婉曲的な意味、あるいは「笑っているような顔をして」のような比況の意味を表現している可能性がある (後述)。

(17) この文と(26)の意味解釈には問題がある。ここでは仮に「ている」と訳した。(23)について白沢氏は「藤村さん来

- (28) sinkikasp-an kane humas
 疲れ過ぎる-INDEF. INTR. SUBJ 気がする
 「私は疲れ過ぎた気がする」

3. 3. 副助詞的用法

副助詞的用法は特定の副詞的形式に後続する場合に限られているようである。特に、引用の形式 sekor 「～と（言う）」に後続した例が多い（訳は付けずに置く）。

- (29) teeta kane sukup hontom ta naani pak
 昔 若い 途中 に あやうく
 rep un kur utar, i-rayke
 沖の人間たち INDEF. OBJ. -殺す
 「昔、若いころにもうちょっとで外国人達が私を殺すところだった」

- (30) ranma kane katkor kane, kunne hene tokap hene
 いつも 習慣とする⁽¹⁹⁾ 夜 も 昼 も
 kem ru etok kem ru oka a-sikkotesu
 針 道 先 針 道 後 INDEF. TR. SUBJ. -目をやる
 「いつものような様子をして夜も昼も針の縫い目の後先に私は目をやった」

- (31) i-neno kane an hekaci
 INDEF. OBJ. -とおりに いる 男の子
 「私にそっくりの男の子」

- (32) pirka kamuy a-se wa sap-an na,
 良い クマ INDEF. TR. SUBJ. -背負う て 下る-INDEF. INTR. SUBJ. ぞ
 a-onaha ek wa onkami yak pirka na
 INDEF. TR. SUBJ. -父 来る て 礼拝する なら いい ぞ
 sekor kane haweoka kor
 と 言う ながら
 arki kor, arpa-an ma
 来る と、 行く-INDEF. INTR. SUBJ. て
 「良いクマを私たちは背負って来たよ。お父さんが来て礼拝すればいいよ、と言いながら来る

(19) katkor の意味は実はよくわからない。ここでは「常とする、習慣とする」のような意味に解釈しておく。従って katkor kane の kane は助動詞用法とすべきかもしれない。

と私は行って」

- (33) a-ahupte ciki he pirka somo ciki he pirka

INDEF. TR. SUBJ. -入れる ならば か いい ない ならば か いい

sekor kane, cise kor kur, kowepekennu akusu

と 家の主人 に尋ねる と

「入れたらいいのか入れないのがいいのかと家の主人に尋ねると」

- (34) hunak wa sino e-ek ruwe ne ya sekor kane

どこ から 本当に 2SG. -SUBJ. -来る の だ か と

a-kouwepekennu akusu, hunak or e-kus wa

INDEF. TR. SUBJ. -に尋ねる と どこ 所 2SG. SUBJ. -通る て

hunak wa e-ek ruwe ne ya sekor

どこ から 2SG. SUBJ. -来る の だ か と

a-kouwepekennu akusu,

INDEF. TR. SUBJ. -に尋ねる と

periruspe pariruspe cinkew kasi a-rukuste sekor kane hawean

ペリルシペパリルシペチンケウカシアルクシテ と 言う

「本当にどこから来たのかと私が尋ねると、どこを通って来たのかと尋ねるとペリルシペ……

と言った」

- (35) tane mosir hoppa nispa a-ne ruwe ne

今 世 去る 旦那 INDEF. TR. SUBJ. -だ の だ

sekor kane sine nispa isoytak

と 一人の 旦那 物語る

「今、私は世を去ろうとする男であるのだと一人の男が物語った」

- (36) taan sintoko en-kore sekor ku-ytak akusu,

この シントコ 1SG. OBJ. -くれる と 1SG. SUBJ. -言う と

taan sinotko anakne, a-eyyok ka somoki

この シントコ は INDEF. TR. SUBJ. -売る も しない

a-korar ka somoki p ne wa sekor kane,

INDEF. TR. SUBJ. -あげる も しない もの だ よ と

hawean, kor ehunara

言う ながら 惜しがる

「このシントコをくれと私が言うと、このシントコは売らないし、やらないものだと言って惜しがった」

- (37) ekasi kor, sitomusi saya or wa makiri hacir,
 お爺さん 持つ 下げる 鞘 から 小刀 落ちる
 korka, eramuskari no arpa wa os k-arpa wa ku-womare wa,
 けれど 知らない て 行く て 後から 1SG. SUBJ. -行く て 1SG. SUBJ. -拾う て
 ekasi ku-kore akus hi oy oy sekor kane,
 お爺さん 1SG. SUBJ. -あげる と ヒーオイオイ と
 ku-hacire hi ka k-eramuskari no k-ek a p,
 1SG. SUBJ. -落とす こと も 1SG. SUBJ. -知らない て 1SG. SUBJ. -来る た もの
 hi oy oy hi oy oy
 ヒーオイオイ ヒーオイオイ

「お爺さんの下げていたナイフが鞘から落ちたけれど気づかずに行く後から私は行って拾って、お爺さんにあげたらありがとうと、落としたことも知らないで来たのにありがとうって(ほめてくれた)」

上の例では、動詞ではなく、副詞的形式に付くので、とりあえず「継続」のような概念は問題としなくてよいであろう。では「驚き」、「意外」、「強調」の意味はどうであろうか。そのような解釈と相容れない、というほどではないが、特に「驚き」や「意外」、「強調」の意味を含んでいないように思われる文脈においても kane が用いられている例は少なくない。例えば、(37)の例も、落とし物を教えて礼を言われるのはむしろ当然で、「驚き」、「意外」の意味とは必ずしも適合しない。また、kane が色々の副詞に自由に付くのではなく、引用を表す副詞的形式 sekor の後でもっぱら用いられることの説明が、「驚き」、「意外」、「強調」の意味とどう関係付けられるのか、あまり明確でないように思われる。なによりも、テキストに現れる極めて多数の sekor kane の用例すべてに「驚き」、「意外」、「強調」のような意味を与えられるものかどうか、少なからぬ疑問がある。

なお、副助詞的用法の kane にも、分布上の特色がある。まず、sekor kane という形式の用例はそのほとんどが口承文芸からの用例に限られており、日常会話的な表現の用例は sekor kane の全用例302個のうち、上に挙げた(36)と(37)のわずか2例しかない点が注意される⁽²⁰⁾。また、nenô「ように、とおりに」という比況を表す後置副詞の後では用いられるのに、同じく比況を表す後置副詞である koraci「ように、同様に」の後では用いられた例がない。また noyne「ように、らしく」、pekor「あたかも～のように」のような接続助詞の後でも用いられた例がない。

(20) この傾向は、田村(1993)によれば、沙流方言においても同様である。sekor kane の全用例49例中、日常会話表現の例は1例のみであった。

3. 4. まとめと問題点

上で述べてきたように、従来の kane に関する説明（継続、意外、驚き、強調）は、千歳方言の多くの例に対しても有効と思われる場合が少なくないことがわかったが、その一方で必ずしも適合しない例も見いだされる。この原因は、記述の不備というよりもむしろ対象としている方言の差異に基づくものである可能性もあり、問題は単純ではない可能性が高い。しかし、それらを斟酌しても、少なくとも以下のような大きな問題点が依然未解決のまま残されていると言わざるを得ないであろう。

- 1) kane が継続（アスペクト）、「驚き、意外」（一種のモダリティ）という、性質のかなり異なる機能を合わせ持つことができるように見えるのはなぜか。
- 2) kane は「意外、驚き」を初めとする一種の強調的意味を有することがしばしば指摘されてきたが、引用表現などにおいて、そのようなニュアンスが必ずしも明白には認められない場合もある。
- 3) kane の副助詞的な用法が主として口承文芸の引用表現において特に多く見られる理由は何か。

次節ではこれらの点を中心に kane の機能をより総合的に見ることにしたい。

4. kane の機能再考

以下では、以上の議論で明らかになった問題を踏まえつつ、千歳方言の kane の機能について再考察し、様々な kane の用法を統一的に理解する方法を探ってみることにしたい。無論、現時点では、完全な説明を与える力は筆者にはないことを率直に認めざるを得ないが、今後の kane に関する本格的な議論に材料を提供するための一つの仮説としてあえて提示するものである。

まず、3. 1 で示したように、助動詞的用法の kane は名詞的形式を修飾することはできるが、副詞節に収まりにくく⁽²¹⁾、終助詞とも全く共起しない。このことは kane がアスペクトを表す形式というよりはむしろ、いわば終助詞と共通する性質を有するモダリティーを表す形式であることを示唆するものである（すなわち、文末以外に立ちにくく、他の終助詞と排他的な関係にある）。さらに、3. 2 の考察によって、接続詞的用法の kane は、比況を表す noyne 「ように、同様に」、pekor 「あたかも～のように」、nenô 「とおりに」と同じ位置に立つことができるので、これらの助詞、後置副詞と共通する特徴を持つ可能性がある。言うまでもなく、これらの形式は現実性の度合いの判断に用いられ、従ってモダリティーと深く関係する形式である (Palmer 1986)。もっとも、3. 3 で示したように、同じく比況を表す形式とは言っても、nenô とは共起できるが koraci 「ように、

(21) 日本語の類似した現象については南 (1974) に述べられている。

をかく)、対象との高い近似を表す通常の文脈では比況の形式として用いられ(疲れすぎのような気がする)、さらに程度が弱い文脈ではおそらく単なる婉曲表現(川にざぶざぶ入りなどして)として用いられ⁽²⁵⁾、最も極端な場合は程度の意味をほとんど失って単なる同時性の表示のみを担うものと考えられる⁽²⁶⁾。このような用法を未完了のアスペクト形式として定着させたのが静内方言、様似方言のような方言であろう⁽²⁷⁾。なお、口承文芸の引用表現に kane が多く見られる事実は、既に述べたように、少なくともそれらの kane の一部が婉曲表現である可能性を示すものと考えられる。すなわち、引用は、発言者のことばをそのまま繰り返すのが原則であるが、長い発言を一言一句そのまま反復するのは実際には困難な場合が少なくないから、婉曲的な表現が選択される可能性が生ずると考えられる。そこで、kane の持っている「程度の形容」という機能が、婉曲的表現として選択されるのだと考えられる。すなわち、「……と言った」に対して、「……などと言った、……というほどのことを言った」のように、幾分遠回しな、もったいぶった表現として用いられている可能性を考慮する必要があると思われる。口承文芸に多く用いられるのは、意図的に婉曲的表現を用いることによって表現効果を上げるためのレトリックとして意識されているためではないだろうか(日常会話的表現において用いられた数少ない例も、場面の叙述という、ある意味では口承文芸に近い文脈で用いられている)。

5. おわりに

繰り返しになるが、kane に「驚き、意外」のような一種の「強め」の意味があるとする従来の記述は、基本的には正しいものの、不十分な説明であり、kane 本来の意味に属するものではない、文脈に由来する語用論的な含意に基づくものに過ぎないものである可能性がある。すなわち、kane の意味は、「あるもの、ある事柄と等価であるという基準を満たすのに足りる程度」⁽²⁸⁾のようなものとするほうが、kane の多様な意味を統一的に説明できる可能性がある。もっとも、従来の記述においても、kane に対して「なんか」、「など」、「まま」のような訳語が当てられている場合がしばしばあり、kane の意味が「驚き、意外」に限られるものではないという可能性は既に部分的に

(25) ただし、場合によっては皮肉、軽蔑、遺憾のような特殊なニュアンスが生じる可能性もあると思われる。例えば、(21)は、「馬鹿げたことに、ずぶ濡れになるのに、川にざぶざぶ入ったりなんかして!」という意味である可能性がある。また、(29)、(30)の teeta kane, ranma kane のような例の kane は説明が困難であるが、婉曲表現によって「もったいぶった感じ」あるいは「おももしろい感じ」を加味した一種の文学的な表現ではないかと推測される。

(26) ここでは語用論的含意として説明したが、形式そのものの意味との区別は、なお一考を要する。また、kane の意味の変異についてのここでの説明が思弁的に過ぎることも問題であるが、一つの仮設として提示した。特に、同時の意味を表す場合の説明は正直苦しい。或いは高い近似を表す比況の用法(そのとおりに、そのままに)と関係付けられる可能性もあると思われる。

(27) 従って、同じく同時性を表すと言っても、沙流方言、千歳方言における kane は、静内方言、様似方言における kane が線上で最左端を占める(すなわち最も「無色」)とすると、それより幾分右寄りに位置すべきものとも考える必要があるかもしれない。

(28) 「程度」というだけでは極めて漠然としている。今後、より精密な定義を行う必要がある。

は気が付かれていたと思われるが⁽²⁹⁾、体系的な考察はいまだなされていないと言える。本稿では、kane が、ある場合には明確な意味を失って「訳すに及ばず」と言った状況になる反面、全く正反対に驚き、意外のような強調的意味を表したり、また、同時的、継続的意味も表すことができるのは、kane が「程度」という基本的意味を持つことによると考えられる可能性を提案した。このことは、たとえば日本語の「ほど」が、「思ったほど」のように程度を表す一方で、「一万円ほど」のような婉曲的表現、「死ぬほど」のような強調的表現でも用いられることと軌を一にしている⁽³⁰⁾。今後、さらに実証的にこの仮説を検証したいと考えている。

謝辞

本稿における筆者採録のアイヌ語資料のうち、千歳方言の資料は故白沢ナベ氏(1905—1993)、様似方言の資料は故岡本ユミ氏(1896—1990)からご教示いただいたものである。ここにお名前を記し、これらの方々に深い感謝を捧げたい。また、草稿の段階で極めて適切なご指摘を下された査読者の方々にも心からお礼申し上げる。なお、本稿は、平成13年度科学研究費(「消滅の危機にあるアイヌ語諸方言の方言分類に関する研究」(課題番号12039202)、研究代表者北海道大学大学院文学研究科佐藤知己[特定領域(A)「消滅の危機に瀕した環太平洋の言語」、研究代表者大阪学院大学教授宮岡伯人]、基盤研究(C)、「古文獻によるアイヌ語諸方言の研究」、研究代表者北海道大学大学院文学研究科佐藤知己、課題番号12610547)による研究成果の一部である。

参考文献

- 浅井亨. 1969. 「アイヌ語の文法—アイヌ語石狩方言文法の概略—」. アイヌ文化保存対策協議会(編). 『アイヌ民族誌』下巻. 東京: 第一法規. 771—800.
- 知里真志保. 1936 [1974]. 『アイヌ語法概説』. 東京: 岩波書店. (復刻. 『知里真志保著作集』4. 東京: 平凡社.)
- 知里真志保. 1942 [1973]. 「アイヌ語法研究—樺太方言を中心として—」. 『樺太庁博物館報告』4-4. (復刻. 『知里真志保著作集』3. 東京: 平凡社.)
- 福田(田村)すゞ子. 1960. 「アイヌ語沙流方言の助動詞」. 『民族学研究』24-4. 東京: 日本民族学協会. 67-78.
- 萱野茂. 1996. 『萱野茂のアイヌ語辞典』. 東京: 三省堂.
- 金田一京助. 1931. 「アイヌユーカラ語法摘要」. 『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』2. 東京: 東洋文庫. 1-233.

(29) 知里、田村、中川の記述を参照。また、山邊(1913: 344)では、本稿で提案したものと同様な訳語が与えられている場合がある。「ナイトムニシバナハカーネアンニシパウタラ 内友の酋長などの諸酋長」(原文のまま、ただし傍線筆者)。

(30) 奥津他(1986)等を参照。なお、樺太方言の命令の kanne についてはさらに研究が必要であるが、婉曲用法で説明が可能ではないかと考えられる。

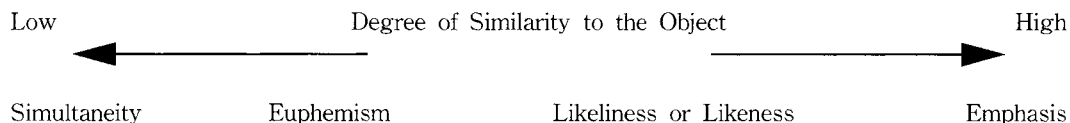
- 切替英雄. 1989. 『『アイヌ神謡集』辞典』. 札幌: 北海道大学文学部言語学研究室.
- 益岡隆志、田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法一改訂版』. 東京: くろしお出版.
- 南不二男. 1974. 『現代日本語の構造』. 東京: 大修館書店.
- 村崎恭子. 1979. 『カラフトアイヌ語一文法篇』. 東京: 国書刊行会.
- 中川裕. 1995. 『アイヌ語千歳方言辞典』. 東京: 草風館.
- 奥田統己. 1997. 「アイヌ語静内方言の副助詞と終助詞」. 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』3. 札幌: 北海道立アイヌ民族文化研究センター. 195-214.
- 奥津敬一郎、沼田善子、杉本武. 1986. 『いわゆる日本語助詞の研究』. 東京: 凡人社.
- Palmer, F. R. 1986. *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Refsing, Kirsten. 1986. *The Ainu Language*. Århus: Aarhus University Press.
- 佐藤知己. 2000. 「アイヌ語千歳方言における反復による有音休止」. 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』6. 札幌: 北海道立アイヌ民族文化研究センター. 207-217.
- Sato, Tomomi. (forthcoming). A Basic Vocabulary of the Samani Dialect of Ainu. *Hokkaido Daigaku Bungakubu Kiyo* [The Annual Report on Cultural Science] 106. Sapporo: The Faculty of Letters, Hokkaido University.
- 田窪行則、西山佑司、三藤博、亀山恵、片桐恭弘. 1999. 『岩波講座言語の科学7 談話と文脈』. 東京: 岩波書店.
- 田村すず子. 1972. 「アイヌ語沙流方言における《...して...》の表現」. 『國學院雑誌』73-11. 東京: 國學院大學. 147-163.
- 田村すず子. 1988. 「アイヌ語」. 亀井孝他(編). 『言語学大辞典』1. 東京: 三省堂. 6-94.
- 田村すず子. 1993. 『アイヌ語音声資料(1-6)語彙』中巻. 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子. 1996. 『アイヌ語沙流方言辞典』. 東京: 草風館.
- 山邊安之助. 1913. 『あいぬ物語』. 東京: 博文館.(復刻: 河野本道選『アイヌ史資料集』6. 札幌: 北海道出版企画センター, 1980. 翻刻: 『金田一京助全集』6. 東京: 三省堂, 1993.)

The Functions of *Kane* in the Chitose Dialect of Ainu: Why Does This Form Have So Many Different Meanings?

Tomomi SATO

Summary :

It is known that the form *kane* is found in many Ainu dialects, including the Chitose dialect and that it roughly has two basic meanings: progressive and emphasis. However, as soon as we look at these meanings, we find that they seem to be too different to be assigned to the same form: one is concerned with aspect and the other, as it were, with modality. I try to show that these different meanings arise from pragmatic implication and that they are not the proper meanings of *kane* as such. I argue that *kane* is a kind of semblative form whose basic meaning could be defined as something like "in (much) the same degree," because *kane* can also occur in contexts where other typical comparative or semblative forms usually occur. Thus, the various meanings of *kane* can be accounted for as follows: If *kane* is used in the context where high similarity or sameness happens to be expressed, it takes on the meaning of emphasis. As the degree of similarity goes down according to contexts, it comes to take on various other meanings, e.g. likeliness or likeness. At or near the lowest end of the degree, however, it almost completely loses its concrete lexical meanings and is merely used to show more abstract meanings, i. e. euphemism or mere simultaneity. This process can be shown schematically as follows:



Key Words : Ainu, the particle *kane*, aspect, modality, pragmatic implication